

9 乳癌 sentinel lymph node 迅速診断におけ

る精度向上の試み

中央検査部病院病理検査室¹ 第1病理学教室²

○伊藤隆雄¹, 野並裕司¹, 桜田実¹, 澤田達男²,
小林槇雄^{1, 2}

【背景】乳癌の治療法として乳房温存術が広く普及し、また sentinel lymph node をリンパ節転移のモニターとしてリンパ節郭清の軽減が行われ、乳癌手術におけるリンパ節の組織学的診断の重要性は増加している。近年、通常の迅速検査法では見逃される微小転移巣が25-30%にのぼるとの報告がある。

【目的】迅速時の微小転移検出の有効性を検討するため、sentinel lymph node を用いリンパ節捺印細胞診を施行し検討した。さらに、迅速組織診断と細胞診診断の不一致例に関して捺印標本を用いた免疫組織化学を施行し検討した。

【方法】病院病理科に迅速診断として提出された62例の sentinel lymph nodes 169 個について検索した。組織はパラフィン標本から連続切片を作製し検討。捺印細胞診について免疫組織化学染色を施行した。

(結果)迅速組織診断で陰性であった4例は、迅速細胞診は陽性で迅速検査時に診断可能であった。迅速組織診断で陽性であった4例は捺印細胞診では陰性であった。また、迅速組織診、細胞診ともに陰性で、解凍後の組織学的検討で陽性の例が1例認められた。

【考察】通常の迅速 HE 標本のみの観察では微小転移巣の検出は限界があり、捺印細胞診の併用は artifact の強い場合に特に有効であった。細胞診で陰性であった例を検討すると、サンプリングの不良が3例、またリンパ節が微小で十分な捺印が得られなかった症例が1例であった。微小転移に関しては、連続切片作製と免疫組織化学の併用で発見しうる癌細胞の micro metastasis (2mm 以下)は予後に影響を及ぼさないと報告がある。現在のところ、迅速時における転移巣の検出には迅速診断標本の quality の向上と迅速捺印細胞診、および迅速免疫組織化学的の併用が好ましいと考えられる。

10 マイクロウエーブティッシュプロセッ

サーRHS を用いた腎生検におけるパラフィン標本迅速化の検討

腎臓病医療センター病理検査室¹ 泌尿器科²
第四内科³

○中山英喜¹, 堀田 茂¹, 川島真由子¹, 田辺一成²
新田孝作³, 東間 紘²

【目的】最近、病理診断の迅速化が、医療に多くのメリットをもたらすことが言われている。当センターでも腎臓移植医療をはじめ病理診断の迅速化の必要性が問われている。今回我々は、マイクロウエーブティッシュプロセッサRHS を使用し、腎生検に適した、パラフィン包埋の条件を検討した。

【材料】腎腫瘍で摘出された腎組織の正常部分を、腎生検と同程度のサイズに細切した組織を材料とした。固定液は、10%緩衝ホルマリンを、RHS の脱水伸介剤には、イソプロピルアルコールと JFC を使用した。また、使用機器は、マイクロウエーブティッシュプロセッサRHS とサクラ ETP を使用した。

【方法】① 固定条件: RHS マイクロウエーブ 30 分固定および浸透固定 (30 分~24 時間) ② 固定後の条件: RHS (JFC, イソプロピルアルコールの比較)およびサクラ ETP で処理. RHS 使用条件は、生検の 60 分プロトコルに準じた。ETP の使用条件は、1 層 1 時間 (14 時間) で使用。③ 評価方法は、当施設での腎生検処理法を、染色は HE・PAS・Masson・PAM 染色の染色性を基準とし 3 段階で評価した。

【結果】

①浸透固定の 30 分, 1 時間では、全ての処理に、赤血球の溶血と組織の収縮が認められた。

②浸透固定の 3 時間以上でも、組織の収縮傾向や抗酸性の染色性は JFC が一番強く、イソプロピル, ETP の順に良好な結果が得られた。

③RHS マイクロウエーブ固定 30 分でも、組織の収縮傾向や抗酸性の染色性は JFC がやや強く、イソプロピル, ETP でほぼ良好な結果が得られた。ただし、全ての処理で赤血球の変形および凝集傾向が見られた。

【考察】今回の検討では、まだ満足できる結果は出なかった。今後は、RHS でのマイクロウエーブの固定時間や伸介剤の更なる検討が必要と思われた。